

資料と公共性 : 2019年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦

九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

藤川, 隆男

大阪大学大学院人文科学研究科 : 教授

市澤, 哲

神戸大学大学院人文科学研究科 : 教授

松田, 陽

東京大学大学院人文社会系研究科 : 准教授

他

<https://doi.org/10.15017/2557155>

出版情報 : 2020-03-06. 九州大学大学院人文科学研究院

バージョン :

権利関係 :

1. シンポジウム「公共歴史学、公共考古学の射程 ―歴史実践と資料―」

(九州西洋史学会 2019 年春季大会の共催)

日時：2019 年 4 月 13 日（土） 14 時～17 時 30 分

会場：九州大学西新プラザ 大会議室 A

共催 九州西洋史学会（2019年度春季大会）、九州歴史科学研究会

プログラム

趣旨説明

岡崎 敦

報告

藤川 隆男

「21世紀の歴史学とパブリック

—IMBY/【インターネット・アニメ・モノ・アート・デジタル】・ヒストリー」

村野 正景

「中米のパブリック考古学と博物館学の動向」

全体討論

九州西洋史学会 2019 年度春季大会と共催で、「公共歴史学」と「公共考古学」に関するシンポジウムを開催した。

人文諸科学における公共性問題を考える際、「公共」の形容詞に関する諸学問の動向を無視することはできない。日本ではまだあまり馴染みのないこれらの学問は、欧米ではすでに 1960 年代末から明確に意識され、現在では、いわゆる社会のなかでの「歴史実践」にとどまらず、アカデミズムにおいても、社会における専門的キャリア形成においても、確固たる認知を受けている。

今回のシンポジウムでは、ながらく歴史学と「パブリック」との関係を、学術および歴史実践の双方において、多彩なかたちで展開されてきた藤川隆男氏をお迎えして、ご自身のこれまでの経験を振り返っていただきながら、歴史の公共性問題について論じていただいた。

他方、日本において、海外の関係の動向がもっとも多く紹介されている考古学の領域から、共同研究のメンバーでもある村野正景氏に、藤川氏の報告を念頭にお話しいただいた。

以下では、藤川氏のエゴ＝ドキュメントともいえる、公共歴史学についての論考を中心にしながら、これを補足するかたちで、当日、シンポジウムの趣旨説明として用意された岡崎論考を配したものである。公共考古学（パブリック・アーケオロジー）については、今年度、本格的な研究会を、村野氏のイニシアティブのもとに別途開催したことから、まとめてそちらに譲ることとした。